

藤原公任の私撰集編纂

——『金玉集』『深窓秘抄』の配列と構成から

山下文

はじめに

藤原公任は数多くの和歌集を編んだ。自撰とされるものだけでも、勅撰集に準じた『如意宝集』『拾遺抄』、それよりも小型の私撰集『金玉集』『深窓秘抄』、和漢の秀句を併載した『和漢朗詠集』、歌合形式の『前十五番歌合』『三十六人撰』、歌論書『新撰髓脳』『九品和歌』と形態も様々である。公任は私撰集に対して並々ならぬ情熱を注いでいたようである。また、『後拾遺和歌集』(以下、「和歌」を略す。他の歌集もこれに準ずる)仮名序には「かしこきもいやしきも、知れるも知らざるも、玉くしげあけくれの心をやるなかだちとせずといふことなし」とあり、公任の著作は貴賤を問わず賞翫されたという。中でも、『金玉集』と『深窓秘抄』は、所収歌・部立・配列・構成などに類似点が多く、『深窓秘抄』は『金玉集』を基幹にして成立したと考えられている。本稿では、特に、『金玉集』と『深窓秘抄』に着目し、配列と構成から公任の撰歌態度などを探りたいと考える。はじめに、『金玉集』と『深窓秘抄』について、既に明らかにされていることを、簡潔にまとめておきたい。

まず、『金玉集』についてである。『金玉集』は『古今集』『後

撰集』『拾遺抄』に見られる秀歌を選び出し、四季・恋・雑に分類した私撰集である。甲本系統・乙本系統・丙本系統・冷泉家時雨亭文庫蔵本系統の四系統に分類されており、うち、甲・乙・丙本系統は作者表記の異同などによって、先後関係と大まかな成立年次を知ることができる^(一)。この三系統を代表する諸本と、その成立年次を示した。

甲本系統 ギメ美術館図書館蔵本 寛弘四年(一〇〇七)以前
乙本系統 群書類従本 寛弘四〇八年

丙本系統 穂久邇文庫蔵本 寛弘八年六月以降

冷泉家時雨亭文庫蔵本系統は、この三系統とは異なる点が著しく多く、「異本系統」とされている。

『深窓秘抄』は藤田美術館に蔵される平安時代後期の書写本が唯一の完本として知られる。総歌数一〇一首で四季・恋・雑に分類され、詞書がない。『金玉集』歌の七五%が『深窓秘抄』に収められる上に、作者表記は『金玉集』の丙本に最も近いことから、『深窓秘抄』は『金玉集』を承けて成立したと考えられている^(二)。特に人麻呂詠が『金玉集』では二首(甲・乙本系統では一首)であるのに対し、『深窓秘抄』は六首を収め、巻頭も飾っていることから、『深窓秘抄』は「公任の人麿評価

に關しての『金玉集』の改訂版^(三)と捉えられている。

稿者は、『金玉集』諸本の中でも特異な形態を持つ、冷泉家時雨亭文庫蔵本の成立を論じたことがある^(四)。その中で稿者は、冷泉家時雨亭文庫蔵本は甲・乙・丙本系統と全く別系統の伝本ではないが、本来の編者である公任とは別の享受者（書写者など）の手が加わっており、詞書を失った可能性が高いと指摘した。また、藤田美術館蔵『深窓秘抄』についても、詞書が全くなく、作者表記のあり方も冷泉家時雨亭文庫蔵本に類似しており、二次的な改編がほどこされている可能性が高い。さらに、現存する古筆切のなかに、詞書のある『深窓秘抄』のものとと思われる断簡が見出される^(五)。このようなことから、現存する『金玉集』『深窓秘抄』を、公任が編纂した当初の姿をとどめたものと即断することはできない。これまでは、『金玉集』諸本間の詞書の異同と『深窓秘抄』に詞書がないことは、公任の撰集意図に關連づけて論じられてきた。稿者は『金玉集』は詞書のあるもの、『深窓秘抄』は詞書のないものという前提は捨てるべきである^(六)と考える。

そこで本稿では、詞書ではなく配列や構成に着目して考察をおこなう。それによって、公任がいかにして『金玉集』『深窓秘抄』を撰集したのか、また何故、類似した形態の和歌集を二度にわたって編んだのかを検討する。なお、本稿における引用は特に断らない限り、『金玉集』は丙本系統の穂久邇文庫本に、『深窓秘抄』は藤田美術館蔵本に拠った。他の歌集については「附記」にまとめて示した。また、引用に当たって表記を改めた箇所がある。

一 『金玉集』と『深窓秘抄』の関係

それでは、配列と構成の考察に入る前に、『金玉集』と『深窓秘抄』は別個に編まれたものではないということを確認しておきたい。先に述べたように、『深窓秘抄』は『金玉集』の改訂版とされてきた。それは、『深窓秘抄』の約六割の歌が『金玉集』所収の歌と重なっており、配列に類似が見られ、さらに、『深窓秘抄』の方が和歌集として整っていることなどによる。

その他にも、『金玉集』と『深窓秘抄』の近さを表す例がある。一条摂政藤原伊尹の「いにしへは散るをや人の惜しみけむ今は花こそ昔恋ふらし」歌は、『拾遺抄』では雑部上（392）に収められている。詞書には「中納言敦忠まかり隠れて後、比叡の西坂下の山庄に人々罷りて、花見侍りけるに」とある。『拾遺抄』では、花を詠んだ純粹な四季歌とは理解し難く、昔のままの桜の花と今は亡き敦忠が重ね合わせられている。このように見ると、「昔は花の散るのを主である敦忠が惜しんでいたが、今は花の方が敦忠を恋しがっていることだろうよ」と、敦忠の死を悼む気持ちが込められていると理解される。一方、『金玉集』では20番に、『深窓秘抄』では23番に収められており、ともに春歌として採られている。甲・乙本系統には、「中納言小野の家にて」という詞書が見られるが、花が散るのを惜しんだ人が、今は亡き敦忠にあたるかどうかは問題にならない。公任が『金玉集』『深窓秘抄』においてこの歌を春部に収めたのは、敦忠を悼む歌としてではなく、「花」に重きを置いた四季の歌として理解したためと考えられる。『金玉集』『深窓秘抄』では、荒廃した屋敷と美しく咲き誇る桜の花の対比が主題となった、

純粋な春歌として提示される。また、『金玉集』61番の藤原高光歌「しばしだに経難く見ゆる世の中にうらやましくも澄める月かな」も同様である。初句に異同がある。『拾遺抄』、『金玉集』甲・乙本系統、『高光集』では「ここにだに」、『金玉集』丙本系統・冷泉家時雨亭文庫蔵本、『深窓秘抄』では、「しばしだに」とある。丙本系統は『金玉集』の中でもより最終稿に近いものであつて、この例は『深窓秘抄』が『金玉集』からの改訂によつて成立していることを示唆している。

このように、『深窓秘抄』の歌句は、『拾遺抄』よりも『金玉集』と密接に関わっている。『金玉集』と『深窓秘抄』は別個に編まれたのではない。このことを確認した上で、『金玉集』『深窓秘抄』の四季部と雑部の配列・構成についての考察に移る。

二 四季部の配列・構成について

四季部は『金玉集』『深窓秘抄』ともに、概ね季節の順行に従つて歌が配されている。このことは既に、先達によつて指摘されている²⁶⁾。ここでは、全ての歌を挙げることはしないが、春・夏・秋・冬の配列を簡潔に示しておく。

春部は『金玉集』では立春（1）にはじまり、惜春（22）に終わる。全体を通して、季節の順行に従つた配列になっている。『深窓秘抄』は新年（1）にはじまり、春の果て（27）に終わる。『金玉集』と一七首まで一致しており、歌序に共通する部分も多く大枠では共通した配列を持っている。ただし、『深窓秘抄』では行く春を惜しむ歌に続けて『古今集』春部の掉尾を飾る「けふとのみ」歌を添えて、春の終わりを明確に示してい

る。

夏部は『金玉集』では、ほととぎす（23・24）の二首のみである。夏の始まりも終わりも示さないままに秋部へと続いている。公任の目になつた優れた夏の歌が見られなかったためと考えられている²⁷⁾。『深窓秘抄』ではこれに六首を加えて八首を収めるが、中でも、ほととぎすを題材にした歌は、歌群をなすほどに増補されている。初夏、ほととぎすの一声を希求し（28・29）、寝覚めに聞く（30）。その頃には卯花が咲き誇り（31）、ほととぎすも終夜盛んに鳴いている（32・33）、といった具合である。続けて夏の短夜（34）、夏越の祓（35）の歌を置いて夏部の締めくくりとし、秋部への繋がりを意識した配列がなされている。

秋部は『金玉集』には駒牽（25）にはじまり、秋の暮（31）に終わる七首を収める。概ね季節の順行に従っているが、夏部が夏の果てが示されないままに結ばれていることもあつて、唐突に秋部がはじまつたという感がある。『深窓秘抄』では秋を知らせる風（36）にはじまり、『金玉集』と同じ秋の暮（52）に終わる。『金玉集』よりも歌数が増えた上に、多くの景物が採られており、より充実した構成になっている。

冬部は『金玉集』では初霜の置いた菊（25）にはじまり、年の暮（39）に終わる八首を収める。秋部からの移行もスムーズであり、季節の移り変わりに伴つて歌が収められている。『深窓秘抄』では巻頭は霜によつて秋から冬への移ろいを知るといふ歌（53）に改められているが、巻末は『金玉集』と同じ歌であつて、構造の大枠は同一である。このように、概ね季節の順行に沿つて歌が配されている。

さらに、巻頭・巻末歌に着目すると各部の繋がりが意識されていることがわかる。下段に『金玉集』と『深窓秘抄』の四季部の巻頭・巻末歌を記した一覧表を示した。どちらの場合も、多くの歌に季節の節目となる景物（波線部）が詠み込まれている。ただ、『金玉集』では、先にも述べたように、夏部から秋部にかけての繋がりがなめらかではない。一方、『深窓秘抄』では夏部の巻末に夏越の歌が、秋部の巻頭には立秋の歌が置かれることによって、より整った構成になっている。また、特に『深窓秘抄』の1・27・35番歌には、「昨日」「今日」という語が用いられている。このような表現により、各部の区切りが際立ち、季節の変化を読者に印象づけていると言えるだろう。

また、詳しく述べることはしないが、恋部の配列・構成も『深窓秘抄』の方が整っている。『金玉集』は恋の始まりから思いを遂げるまでの恋の前半部の歌のみを収めるが、『深窓秘抄』では、男の心変わりを疑い（70）、訪れが間遠になり（71・72）、独り寝をかこつ（74）という、恋の後半部の歌が補われている。

さらに、既に多くの先行論に指摘されるように四季部の歌数からも『深窓秘抄』の方がより均整が取れていることが確認される。『金玉集』は春部二二首・夏部二首・秋部七首・冬部八首と、極端に春部に偏っているが、『深窓秘抄』では春部二七首・夏部八首・秋部一七首・冬部一〇首でいくぶん春部が多いものの、春と秋に重点が置かれ、和歌集としてバランスの取れたものになっている。このように、『深窓秘抄』の四季部と恋部は、『金玉集』に比べて一つの和歌集としてのまとまりがより意識された配列・構成になっている。

冬 部		秋 部		夏 部		春 部		
39	32	31	25	24	23	22	1	金玉集
急ぐらん 年月を送り向かふとなに 数ふれば我が身に積もる	菊の花 初霜の置きまどはせる白 心あてに折らばや折らん	霜にぞありける 暮れゆく秋の形見に置 くものは我がもとゆひの	のこま 逢坂の関の清水にかげ見 えていまや引くらん望月	そ聞くべかりけれ さ夜更けて寝覚めざりせ ばほととぎす人づてにこ	かまほしさに ほととぎすいま一声の聞 行きやらで山路暮らしつ	りぬべらなれ 花もみな散りぬる宿は行 く春のふるさとこそそな	と見ゆらん 春日山消えあえぬ雪の花 春立つと聞きつるからに	
62	53	52	36	35	28	27	1	深窓秘抄
急ぐらむ 年月を送り向かふとなに 数ふれば我が身にとまる	る朝霜 山寂し秋も暮れぬと告ぐ るかも楨の葉ごとに置け	霜にぞありける 暮れゆく秋の形見に置 くものは我がもとゆひの	袂寒しも 秋立ちていくかもあらね ばこの寝ぬる朝明の風は	とは言ふなり 神たちも今日の名越の日 ねぎごと聞かず荒ぶる	声も鳴け しひきの山ほととぎす一 家に行きて何を語らんあ	のかげかは だにも立つことやすき花 今日のみと春を思はぬ時	ちにけり がすみ春日の山にはや立 昨日こそ年は暮れしが春	

三 雑部の配列・構成について

次は、雑部についてである。四季部・恋部とは異なり、雑部のみ『深窓秘抄』の方が歌が少ない。『金玉集』雑部の三〇首のうち、九首(59・60・62・66・70・71・74・75・76)が削除され、『深窓秘抄』では新たに六首(85・86・95・97・99・101)が補われている。『深窓秘抄』の雑部は二七首である。先にも見たように、四季部・恋部の配列と構成は勅撰集に準じているが、雑部のものは一見して無秩序なものとして映る。このような点を、川村晃生氏は「何らかのまとまりを意図していない」とし、「優れた歌が選ばれてさえいれば、事足りると考えたものと推察される」と指摘する⁵⁶。一方、阪口和子氏は冒頭五首に関しては海、羈旅、万葉歌人という共通項が認められることから、配列には「なだらかな繋がりが考慮されている」⁵⁷と指摘するが、全体に一貫したテーマは見られないとする。また、両者の配列にも共通点が多く見出される。特に、『深窓秘抄』と『金玉集』の冒頭一〇首は、歌序に異同があるものの全く同じである。

果たして、雑部は秀歌を選び出して置いたものなのだろうか。なだらかな繋がりでまとめられたものなのだろうか。稿者は、賀・離別・羈旅・哀傷といった従来の構成とは異なる、公任独自の分類によって構成されていると考える。『金玉集』と『深窓秘抄』の雑部の配列と構成を、歌句や詠歌状況などに着目しつつ詳しく見てゆきたい。次に、『金玉集』雑部の全三〇首を詞書・作者を除いて掲出する。

- 47 ほのぼのと明石の浦の朝霧にしま隠れゆく舟をしぞ思ふ
48 和歌の浦にしほ満ち来れば潟をなみ芦辺をさしてたづ鳴き渡る
49 世の中を何にたとへん朝ぼらけ漕ぎ行く舟の跡の白浪
50 藻刈り舟今ぞ渚に來寄する汀のたづの聲さはぐなり
51 天の原振りさけ見れば春日なる三笠の山に出し月かも
52 いつしかと君にと思ひし若菜をば法のためにぞ今日は摘みつる
53 まだ知らぬ人もありける東路に我も行きてぞ住むべかりける
54 忘られてしばしまどろむ程もがないつかは君を夢ならで見ん
55 君が住む宿の梢をゆくゆくと隠るるまでにかへり見しかな
56 わたの原やそしまかけて漕ぎ出ぬと人には告げよ海士の釣舟
57 琴の音に峰の松風かよふらしいづれの緒より調べめけん
58 思ひやる心ばかりはさはらじを何へだつらん峰の白雲
59 藤衣流す涙の河水はきしにもまさるものにぞありける
60 思はんと頼めしこともあるものを無き名は立ててただに忘れぬ
61 しばしだに経難く見ゆる世の中にうらやましくも澄める月かな
62 ここにだに光さやけき秋の月雲の上こそ思ひやられる
63 三輪の山いかに待ち見ん年経とも尋める人もあらじと思へば
64 岩橋の夜のちぎりも絶えぬべし明るるわびしき葛城の神
65 天下るあら人神のおひあひを思へば久し住吉の松
66 君が経んやをよろづよを数ふればかつがつ今日ぞ七日なりける
67 年ごとの春の別れを哀れとも人に遅るる人ぞ知りける
68 有明の月の光を待つほどに我がよのいたく老けにけるかな
69 命だに心にかなふものならばなにか別れの悲しかるべき
70 世の中は夢か現か現とも夢とも知らず有りて無ければ
71 流れてと頼めしことはゆくすぬの涙の河を言ふにぞありける
72 たよりあらばいかで都に告げやらん今日白河の関は越えぬと

73 まだ知らぬさと人^はは今日までに来んと頼めし我を待つらん
74 待ちつらん都の人^にに逢坂の関まで来ぬと告げややらまし

75 風吹けば沖つ白浪竜田山夜半にや君がひとり越ゆらん

76 津の国の長柄の橋もつくるなり今は我が身を何にたとへん

これらを見ると、「明石の浦」(47)と「和歌の浦」(48)、「峰の松風」(57)と「峰の白雲」(58)、「三輪の山」(63)と「葛城の神」(64)など、前後して同類の歌枕や類似した表現が用いられている箇所が多い。また、そのような表現が見られなくても、哀傷歌(52・54)や祝賀の歌(65・66)や恋歌(75・76)など、ある程度主題や詠歌事情を意識してまとめられたと思われる箇所がある。他にも、菅原道真(55)と小野篁(56)といった、流謫の憂き目に遭った人物同士の歌が並べられていたり、春の除目に洩れたわが身を愁う歌(67)と帝の恩寵に預かることなく年を取ったことを愁う歌(68)が並べられていたり、前後する歌の多くに何らかの関連が見られる。

また、阪口和子氏も指摘するように、冒頭の五首には海という共通点があり、73番歌を除く末尾の五首には歌枕が詠み込まれているという共通点がある。『金玉集』の雑部は、歌句や主題によって結ばれた二首あるいは三首一組の歌を、さらに歌群としてまとめることによつて成り立っていることと捉えることもできる。ただし、冒頭と末尾以外にはこのようなまとまりはない。また、59・60・71番歌は前後の歌との関連を見出し難い。ただし、『金玉集』雑部は、単に秀歌が抜き出されたのではなく、意図的に編まれていることが確認される。それでは次に、『深窓秘抄』雑部の全二七首を同様に見てゆく。

75 ほのぼのと明石の浦の朝^{きり}に島隠れゆく舟をしぞ思ふ

76 世を何にたとへむ朝^{ほらけ}漕ぎ出ぬと人^には告げよ海士の釣舟

77 和歌浦に潮満ち来れば渴をなみ声辺をわけてたづ^づ鳴き渡る

78 藻刈り舟今ぞ渚に來寄する汀のたづ^づの聲さはぐなり

79 あまの原振りさけ見れば春日なる三笠の山に出し月かも

80 わたの原やそしまかけて漕ぎ出ぬと人^には告げよ海士の釣舟

81 いつしかも君にと思ひし若菜をば法のためにぞ今日は摘みつつ

82 まだ知らぬ人もありけり東路に我も行きてぞ住むばかりける

83 君が住む宿の梢のゆくゆくと隠るるまでもかへり見しかな

84 忘られてしばしまじろむ程もないつかは君を夢なれて見む

85 末の露元の滴や世の中の遅れ先立つためしなるらむ

86 人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな

87 琴の音に嶺の松風かよふなりいづれの緒より調べそめけむ

88 思ひやる心ばかりはさはらじをなにへだつらん嶺の白雲

89 年ごとの春の別れを哀れとも人に遅るる人ぞ知りける

90 有明の月の光を待つほどに我がよのいたく老けもゆくかな

91 岩橋の夜のちぎりも絶えぬべし明るるわびしき葛城の神

92 命だに心にかなふものならば何か別れの悲しきるべき

93 たよりあらば都へいかで告げやらむ今日白河の関は越えぬと

94 まだ知らぬふるさと人^はは今日までに来むと頼めし我を待つらん

95 限りあれば今日脱ぎ捨てて藤衣果てなきものは涙なりけり

96 しばしだに経難かりける世の中をうらやましくも澄める月かな

97 遅れぬてなくなるよりはあしたづのなか千歳を譲らざりけむ

98 天下る現人神のあひおひを思へば久し住吉の松

99 恨みつつ一人寝る夜の明くる間はいかに久しきものとかは知る

100 三輪の山いかに待ち見ん年経とも尋ぬる人もあらじと思へば

101 我が君は千代に八千代にさざれ石の巖となりて苔のむす左右

傍線等で示すように、『金玉集』と同様に、二首ごとに同類の歌枕や類似した表現が見られることが多い。そして、二首を一組にするという語彙的な共通点のないものであっても、ほとなどに詠まれた状況や作者などに関連が見られる。

たとえば、81・82番歌はともに哀傷歌である上に、村上天皇(81)の代に藤原尹伊(82)は左大臣であったという関連がある。それに続く83・84番歌には肉親との別れを惜しむ歌という共通点がある。83番歌は『拾遺抄』の別部卷末に置かれる菅原道真詠で『拾遺抄』の詞書に「流され侍りて後、妻のもとに言ひをこせて侍ける」(流布本系統・貞和本系統には「乳母のもとに」とあり、筑紫から妻に宛てて詠んだ歌である。また、それに続く84番歌は『拾遺抄』恋部下『拾遺集』では哀傷部)に収められるが、詞書には「むすめにまかりをくれて」とある。89・90番歌は『金玉集』でも前後して配されており、いずれも官途の不遇を嘆く歌である。91・92番歌は、恋(雑恋)歌と別歌であって、それぞれ『拾遺集』の雑賀部、『古今集』の離別部に収められており、一見すると共通点はない。しかし、どちらも別れを詠んだ歌であって、作者も共に女性(小大君・遊女白女)である。99・100番歌はどちらも独り寝の寂しさを詠んだ女性の歌である。

このように、『深窓秘抄』にも前後する二首を一組にするという方針は引き継がれており、『金玉集』よりも細部にまで前後関係が考慮されている。それでは、『金玉集』の場合には、冒頭と末尾の五首にのみ歌群が認められたが、『深窓秘抄』の

場合はどのようなになっているのであろうか。

まず、75く80番歌は舟・汀・潮などを詠み込んだ、海の歌群と見なされる。80番の小野篁の「わたの原」歌は、『金玉集』では海とは関係のない別の位置に置かれていたが、『深窓秘抄』の段階で79番の安倍仲麻呂の「天の原」歌の次に移動している。『深窓秘抄』の雑部には他に海に関係する歌はなく、雑部の冒頭に意図的に海辺の景を詠んだ歌を配したと考えられる。

次に、81く84番歌は、哀傷歌を中心とした歌群である。なお、83番の菅原道真の「君が住む」歌は、離別の歌であるが、道真はこの歌を詠んだ筑紫で没しているため、哀傷歌群の中の一首として考えて問題ないであろう。

これに続く85く87番歌は、哀傷歌群にも88番歌以降の離別歌群にも属さないが、85・86番歌には人間の心に去来する感慨を詠んだ歌であるという共通点がある。85番歌は、この世の全てのものは滅びてしまうという無常観を詠んだものである。対する86番歌は、子を思つてあれこれと思い悩む親心を詠んでいる。続く87番歌は内面的な形容から、「琴の音」という聴覚的な題材へと展開し、88番歌にある「峰の松風」の「峰」によって繋がっている。

次の88く94番歌は、離別歌を中心にした歌群である。一部別れとは関係のない歌も含まれているが、遠方へ赴く人物への歌(88・89・92)、遠方へ赴いた人物の歌(93・94)、男に帰りを促す歌(91)など、死別以外の様々な別れを詠んだ歌が集められている。『金玉集』では58・67番にあった餞別の歌二首が、この歌群の88・89番歌に載せられており、ここにも同趣の歌をまとめようとする意図が見られる。

最後に97く101番歌は「久しきもの」を集めた歌群である。一見すると哀傷(97)、神祇(98)、恋(99・100)、賀(101)と、この五首には関連はなさそうだが、歌句には「あしたづ・千歳」(97)、「久し・松」(98)、「久しき」(99)「いかに待ち見ん」(100)「千代」(101)と、長い時間を象徴する言葉が詠み込まれている。一〇一首という半端な歌数であることについて、阪口和子氏は、101番歌は後に加えられたものではないかと指摘する⁷⁰。公任本人が101番歌も実際に撰んだのかはわからないが、97く101番歌を、祝賀の歌群と考えてよいだろう。この97く101番歌の配列方法は、『深窓秘抄』の中でも特異なものである。出典と目される勅撰集にあった哀傷・神祇・恋という本来の部立を棚上げにして、「久しきもの」を表す語彙をたぐり寄せてこの歌群は成り立っている。

ここまで、『金玉集』と『深窓秘抄』の雑部の配列と構成を見てきた。このような配列や構成は独自のものと言えるであろう。撰者公任が典拠として用いた和歌集の部立や詠歌事情だけではなく、歌句や作者の背景などにも深く注視していたからこそ、このような配列と構成が生み出されたのだと考える。これまで、『深窓秘抄』は「公任の人麿評価に關しての『金玉集』の改訂版」と捉えられてきたが、『金玉集』と『深窓秘抄』の性格の違いを人麻呂に關する点のみで説明するのは、不十分であろう。雑部は四季部や恋部に比して、系統立った配列をすることは難しい。公任は『金玉集』の編纂過程に、雑部の体系的な配列方法を模索し、既存の勅撰集とは異なる二首を一組にするという配列法を見出したのであろう。『深窓秘抄』ではその方針をさらに推し進め、二首一揃いの組み合わせを細部にま

で行き渡らせた上に、歌群ごとにまとめている。公任は『深窓秘抄』において独自の配列・構成を確立したと言えるだろう。

むすびに

『金玉集』『深窓秘抄』の編纂が、後の公任にとって非常に重要なものになったことは紛れもない事実である。『金玉集』『深窓秘抄』に見られる二首を一組にするという特徴は、『前十五番歌合』『三十人撰』『三十六人撰』といった撰歌合に通じるものである。また、詠歌状況だけではなく歌句にまで関心の目を向けて歌を配列するという特徴は、『新撰髓脳』の「事おほく添へくさりてやと見ゆるがいとわるきなり。一すぢにすくよかになむよむべき」という記述を思い起こさせる。『金玉集』『深窓秘抄』における試みは、少なからず他の撰集に影響を及ぼしたと思われる。事実、次に示した『金玉集』夏部の23・24番歌は、そのことを如実に表している。

源公忠朝臣

行きやらで山路暮しつほととぎす今一声の聞かまほしきに

忠見

小夜更けて寢覚めざりせばほととぎす人づてにこそ聞べかりけれ

この二首は『拾遺抄』夏部の69・66番に収められており、早くから公任によって見出されていたものであった。ただし、『拾遺抄』の時点では、この二首を対にしようという意図はなかつ

たようである。詞書にもそれぞれ、「きたの宮のもぎの時の屏風に」「天曆御時歌合に」とあり、異なる詠歌事情が示されており、二首一揃いといった印象は受けない。しかし、『金玉集』『深窓秘抄』以降、この二首は『前十五番歌合』『三十人撰』においても番えられており、公任の和歌集において用いられ続ける。公任にとつて『金玉集』『深窓秘抄』の編纂は、勅撰集に做った形態のものから、新しく多様な形態の和歌集を生み出すための、非常に重要な手がかりになったと言えるだろう。

何故、公任がこのような配列・構成を採用したのか、という疑問に対する明確な答えを導き出すことは困難である。ただ、次のような想定が許されはしないだろうか。『金玉集』が成立したとされる寛弘四〜八年(一〇七〜一〇二)当時、公任は既に『拾遺抄』(長徳二・三年(九九六・九九七)頃)を完成させていた。『拾遺抄』成立の数年後(寛弘二〜四年頃)に第三の勅撰集『拾遺集』が『拾遺抄』を母体にして編まれた。あるいは、この勅撰集に対する意識から、勅撰集とは一線を画する配列・構成を持つ和歌集を編んだのではないだろうか。ここまでの考察によって明らかになった事実を踏まえると、公任の様々な形態の和歌集をそれぞれ別個に考えるべきではないと言える。特に、『金玉集』『深窓秘抄』は公任の和歌集編纂過程を明らかにするだけでなく、歌論や歌字なども明らかにする鍵となるはずである。

[注]

(一) 早く、渡辺泰氏によって、甲本↓乙本↓丙本系統の順に成立したと指摘されている(『平安朝に於ける人麻呂歌と公任』、『福岡

学芸大学紀要』1、一九五二年三月)。その後、久曾神昇氏(『西本願寺本三十六人集精成』、風間書房、一九六六年三月)によって丙本系統先行説が出されたが、現在は甲本↓乙本↓丙本系統と考えるのが定説となっている。また、甲本系統の代表的な本文として彰考館本が知られていたが、ミシエル・ヴィエイヤール・パロン氏によって翻刻紹介されたパリ東洋ギメ美術館図書館蔵二条為忠筆本がより古い優れた写本であると認められた(『パリ東洋ギメ美術館図書館蔵二条為忠筆秀歌撰集』影印・翻刻・解題——『古代中世文学論考 第十九集』、新典社、二〇〇七年五月)。

(二) 竹鼻績氏「金玉集」解題(『日本古典文学影印叢刊12』、貴重本刊行会、一九八一年)、樋口芳麻呂氏『平安・鎌倉時代秀歌撰の研究』(ひたく書房、一九八三年)、阪口和子氏『金玉集』と『深窓秘抄』(『貫之から公任へ——三代集の表現——』、和泉書院、二〇〇一年)。

(三) 川村晃生氏「公任の秀歌撰——『金玉集』をめぐる——」(『百人一首と秀歌撰』、風間書房、一九九四年)。

(四) 拙稿「冷泉家時雨亭文庫蔵本『古今金玉集』の生成」(『国語国文』第八〇巻九号、二〇一一年九月)。

(五) 『古筆学大成』第十六卷(講談社、一九九〇年)に、「伝源俊頼筆 金玉集切(二)」として紹介されている断簡がある。小松成美氏は、詞書があるという点に着目して「金玉集切」と認定するが、この断簡に収められているのは『金玉集』丙本系統の56・52・53番歌に相当し、どの系統の『金玉集』とも一致しない。一方、久保木秀夫氏は、歌順が『深窓秘抄』に一致することから、この断簡が『深窓秘抄』のものである可能性が高いと示す(『深窓秘抄』に関する古筆資料二点——伝源俊頼筆断簡・深窓秘抄目録

——、『和歌文学研究』第八十三号、二〇〇一年（二月）。詞書のある『深窓秘抄』が存在していた可能性がある。

(六) 川村晃生氏「公任の秀歌撰——『金玉集』をめぐる——」、阪口和子氏『『金玉集』と『深窓秘抄』』。

(七) 注三参照。

(八) 注三参照。なお、川村氏が考察の対象とするのは『金玉集』についてである。

(九) 阪口和子氏『『金玉集』と『深窓秘抄』』。阪口氏は『金玉集』の雑部の配列について詳細に考察しているが、『深窓秘抄』に関しては「歌順もほぼ『金玉集』に準じている」と述べるに留まっている。『金玉集』と『深窓秘抄』の配列方法は同趣のものと思われるようである。

(十) 注九参照。

〔附記〕

本稿は、和歌文学会関西例会（二〇一〇年七月三日 於京都光華女子大学）において発表した内容の一部をもとに、加筆し執筆したものである。席上において、ご意見・ご指導を頂いた皆様に厚く御礼申し上げます。

本稿において用いたテキストは以下のものである。『金玉集』『深窓秘抄』の調査にあたっては影印を用いたが、翻刻本文も併せて示した。

・『金玉集』甲本系統：ミシエル・ヴィエイヤール・バロン氏「パリ東洋ギメ美術館図書館蔵二条為忠筆秀歌撰集——影印・翻刻・解題——」（『古代中世文学論考 第十九集』、新典社、二〇〇七年五月）

・『金玉集』乙本系統：『群書類従』和歌部、卷一五九

・『金玉集』丙本系統：日本古典文学影印叢刊12（貴重本刊行会、一九八一年）、『新編国歌大観』第二卷（角川書店、一九八四年）
・『深窓秘抄』：日本名筆選2（二玄社、一九九三年）、『新編国歌大観』第五卷（角川書店、一九八七年）
・『拾遺抄』：片桐洋一氏『拾遺抄』（大学堂書店、一九七七年）
・『拾遺集』：『新編国歌大観』第一卷（角川書店、一九八三年）
・『後拾遺集』：『新編国歌大観』第一卷

（やました あや・本学大学院文学研究科博士後期課程）